

行のある群とない群との間には差はないが、反応性
充血時のカーブでは、両者の間に明らかな有意差
($P < 0.001$) がみられ、足部跛行のある群では高
度の筋循環不全が認められた。

。今枝 孟義 仙田 宏平 松浦 省三
(岐大・放)
松下 捷彦
(高山日赤病院・放)

14. 胃癌診断に対する胃スキャン (Gastroscintigraphy) 応用への試み

。伊藤 和夫 立野 育郎 加藤 外栄
(国立金沢病院・放)
神村 盛宜 森田 弘之 高松 脩
(同 ・外)
桑島 章
(金大・核)

胃X線検査、内視鏡検査の進歩発達により、現
在では進行癌はもちろん早期胃癌の診断も容易に
なっている。我々は、迷入胃粘膜の $^{99m}\text{TcO}_4^-$ に
よる診断を参照し、現在胃疾患に対する核医学的
検査法として $^{99m}\text{TcO}_4^-$ による胃癌診断への応用
を試みている。胃スキャンを施行する場合、 γ -Ca-
mera の分解能の問題点は残されているが、検査
上以下の点について考慮することが必要である。

1) 胃の呼吸性移動、2) 胃のぜん動運動、3)
胃内腔へのスキャン用剤への排泄、4) 唾液分泌
の胃内への燕下、5) 管腔臓器、2)3)4) に対
し我々は臭化ブトロピウム 4 mg を早朝空腹時に
筋注し、10分後に ^{99m}Tc 10 mCi 静注し、2~3 分
の priset time にて collimation count 80 万~100
万 count にて撮影している。方法は今後なお改善
しなければならない点が多々あるが一応背臥位正
面像を静注後 5~10 分、10~15 分で撮影後すぐ
に発泡剤を服用させ、20 分、25 分 (PAO. V)、30
分 (sitting) にて image を得ている。症例は少な
くなく一般的なことは言えないが症例を供覧し御
批判を仰ぎたい。

15. 肝疾患における HBs 抗体 (RIA 法) の検索 および抗原・抗体共存例の検討

HBs 抗体の検索は、HBs 抗原とともに肝疾患
の診断、病態の解明に重要な意義をもっている。
我々は今回 'オーサブ' によって検討を加え 2, 3
の臨床的結果を得たので報告した。肝疾患の HBs
抗体陽性率は 1276 例中 38% であり、疾患別にみ
ると急性肝炎 89 例中 19%, 輸血後肝炎 17 例中
24%, 劇症肝炎 14 例中 43%, 慢性肝炎 585 例中
40%, 肝硬変症 265 例中 38%, 肝細胞癌 91 例中
35% (内、肝硬変症の合併 (+) 49 例中 29%, 合併
(-) 40 例中 45%), 胆管細胞癌 10 例中 40%, 転
移性肝癌 197 例中 46%, 慢性 HBs 抗原保有者 8
例中 0% であった。各疾患間で抗体価に高低差の
有無につき調べたが有意差を認めえなかった。
HBs 抗体陽性の慢性肝炎 236 例と肝硬変症 100
例を対象として抗体価の分布を調べたところ 16
~100, 100~200, 200~300, 300~400, 400~
500, 500 以上の各ユニットに 36, 15, 7, 6, 5,
33% を認めた。さらに慢性肝炎と肝硬変症のう
ち、100 ユニット以下の 116 例と 500 ユニット以
上の 110 例を対象として年齢別分布を調べると両
方とも 50 歳代をピークとしてほぼ左右に对称に
分布しており、これは抗体陽性例の絶対数が 50
歳代に多いためで抗体価と年齢間に何らの有意の
関係を認めえなかった。HBs 抗原陽性急性肝炎例
で発症時から 5 カ月目から抗体陽性化を認めた。
また生後 3 カ月目の biliary at-resia (男) に抗体価
500~800 ユニットの、その母親 (24 歳) にも 158
 $\times 10^2$ ユニットの認め抗原同様抗体も母から幼児
へ移行していた症例を経験した。抗原・抗体共存
例 15 例の内訳は劇症肝炎 1, 慢性肝炎 5, 肝硬
変症 5, 肝細胞癌 4 (内、肝硬変症の合併 (+) 3,
(-) 1) であり、その抗体価は、9 例が 16~100
で、6 例が 100~512 ユニットであった。

16. 肝硬変症の肝シンチグラムにおける形態的特 徴